

かなかつたために、かゝるわかゝつても、蜻蛉先生悠々として、小石を兩方にブラサゲて、虚空遙に飛びさることがある。

小石の代りに、大豆を二づゝ水をつけて磨り合せて、クツつけて、暫燥して固くなつた所で、

そのまんなかを、髪毛で以てくゝつても宜しい。

併、時々持て行かれる恐があると、また、抛げ上る際に、紛失する憂があるからして、道具は是非とも二つ以上も造つておかねばならぬ。

この遊びは、紀州の或地方で、夏の夕暮、盛に行はれる。他では一寸見つけないが、中々興味があつて面白い、子供は勿論大人にても、やつてご覽なさい。確に取れることは受合ひ。



恵の滴

やまとの翁

プロシヤのフリードリッヒ二世と申し奉つるは、西暦千七百四十年から、凡五十年間も、王位に居られました。が、通例フリードリッヒ大王と呼ばれましてプロシヤ唯一の明君だつたと申すこととございます。

此大王に付いては、面白い話かまことに澤山ありますが、次の話が其一であります。

或日のことでした。王は、玉座に在して鳴音高く呼鈴を引かれました。が、どーしたものでしたか、誰もお座近く伺うものがない。そこで王は、ご自身お立ち遊して、次の間へ出てご覽遊ばされました所が、給仕がたつた一人椅子によりかゝつて居眠をして居ます。王はすぐ呼び醒さうかと覺

し召されたでしたが、恰其時給仕のポケットから、何か字の書いた紙片が出かゝつて居るのが不圖お目に留りました。王は

「はて、何であらうな」

と覺し召されて、ポケットからソート引き出して、ご覧になりました。

所が、それは給仕のお母さんから贈した手紙で、その中には次の様なことが書かれてありました。

「お前がお上から戴く月給を節して、毎度〳〵私へお金を送つてくれるのは、まことに有り難い。

お前のお蔭でおつかさんは、始終樂に暮して居ます。どうか王さまへよく御忠勤をして、神さまに仕へる積りでお前の身體を王様にお捧げなさい。すればお前も、きつと幸福になりますから」

そこで、王はまた静にもとの玉座にお歸になつ

て、五圓金貨一個をおとりになり、前の手紙と一所に、またソートと給仕のポケットにお入れ遊して置れました。

で、今度は急に呼鈴を烈しく鳴らされました。

給仕は、この音で忽目を醒し、玉座近く伺候致しますると。

「お前眠つて居つたな」

王がお咎めになりました。給仕は、ハッと恐れ入りました。

「陛下、まことに申譯がござりませぬ」

とお謝罪を致しましたが、どんなお叱りを蒙るとかと小な胸は、一方ならぬ混亂を來しました

が、其際不圖ポケットに自分の手を差し入れた所が、手に觸つたのは、たしかに金貨でありましたから、給仕は愕然として、これを取り出し

ましたが、見てる中に顔は眞青に變はり、兩方の眼に、涙を一杯溜めたまゝ、黙つて王を見上げ奉つりました。

で、王は、「あゝイチャシー若者よ」と覺し召されましたが、一向にお氣の付かれぬ御氣色を装はれて

「どーしたのか」

とお尋になられました。給仕は恭々しく膝まづきながら、聲を振はし

「あー陛下、誰かが微臣を陥れ様とします、微臣は此お金のことは、何にも存じませぬ。」

王は

「おー、神を信する者には、神が眠りの中にお授け下される。それは、神の賜じや。早速それをお母さんに送つてやれ、そして朕は、これからいつも

お前ら親子を心に懸て居ると申し遣はして、早く安心させるがよし」

今のままで、一方ならぬ苦悶に胸を痛めた給仕は、このお情け深い主君の賜とお言葉とを拜受して、忽筆や言葉に述べ盡せぬ喜悅に心を躍せましたが、此から後は、益々一生懸命に忠勤を勵みましたとのことでござります。

前號考へ物の解

(一) いる時のいらぬもの、いらぬ時のいるものは

答 風呂の蓋

(二) 世の中に、眞直でたてぬものは、答 屏風。

(三) 頭がなくて帽子あり、足あれど靴なし、答 菌子

(四) やり違ひの紐は 自分で出来るでしよー。